

[担当教員]

所属研究室教員（主に末包伸吾（教授） 櫻橋修（准教授） 光嶋裕介（特命准教授））

■課題概要

「他者」に想いを巡らせ、「他者」と関わり合うことは、生きていく上ではなくてはならないことである。もちろん私たちが属する地域や社会は、日々「他者」とともにあるが、「他者」を介して自らを知り、また自らが変わっていくことこそ、この関わり合いが齎す最大の価値である。では、このような「他者」とともに生きることは、果たして現代において実現できるいるだろうか。建築や都市は、それを後押しできているだろうか。

ところで「他者」は、もともと「自分以外の、ほかの者」（広辞苑）を指していたが、近年では自分以外の家族や自然、動植物など、自らがコントロールできない存在にも拡張して使われている。それは恐らく人間が、こうした存在をコントロール可能な対象と捉えて振る舞うか、もしくは排除してきた社会への問い合わせの表れであろう。住宅は、「自己」のためにつくられ、公共施設は、「個」が「公」からのサービスを受ける場に成り下り、自然は、建築を彩る装飾に矮小化している状況に対し、家びらきやシェア、『動いている庭』（ジル・クレマン）など、様々な試みもすでに実践されているが、ここではさらにその先を考えてみたいと思う。

コントロールできない「他者」を受け入れ、そして自らも変わっていくような動的な状態を受け止める建築や都市は、いかなるものだろうか。自分にとっての「他者」を具体的に想定し、ともに生きるために建築、都市を考えてみてください。

■条件

実在の場所（計画対象）を設定すること。

■提出物

a. 計画案の PDF ファイル

以下の①～④を A2 サイズ (420×594 mm) 2 枚に収めた後、A3 サイズ 2 枚に縮小した PDF ファイル。（解像度は 350dpi を保持し、容量は合計 20MB 以内とする。PDF ファイルは 1 枚目が 1 ページ目、2 枚目が 2 ページ目となるように作成する。A2 サイズ 1 枚にはまとめないこと。）模型写真等を自由に組み合わせ、わかりやすく表現すること。

① 具体的に想定した「他者」を示すこと

② 設計主旨（文字サイズは 10 ポイント以上とし、600 字以内の文章にまとめる）

③ 計画条件・計画対象の現状（図や写真等を用いてよい）

④ 配置図、平面図、断面図、立面図、透視図（縮尺明記のこと）

b. 作品名および設計主旨の Word ファイル

「a. 計画案の PDF ファイル」に記載した作品名と設計主旨の要約（200 字以内とし、図表や写真等は除く）を A4 サイズ 1 枚に収めた Word ファイル。なお、容量は 20MB 以内とする。

*以上の文章は日本建築学会 HP

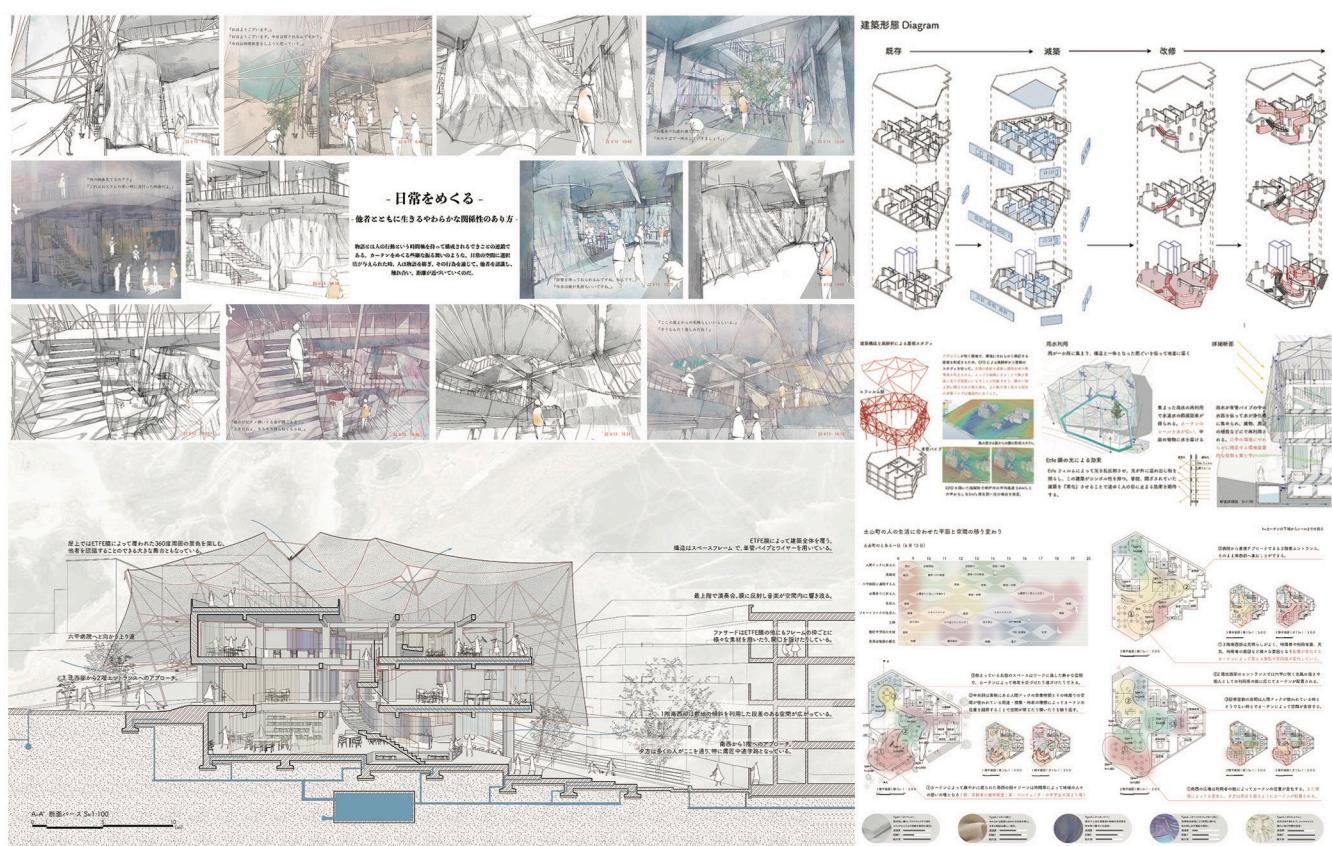
(https://www.aj.or.jp/jpn/symposium/2022/22ssk_compe.pdf) から引用

■条件

日常をめくる - 他者とともに生きるやわらかな関係性のあり方 -

本山有貴 真下健也 有吉慶太 尹道現（光嶋研究室）

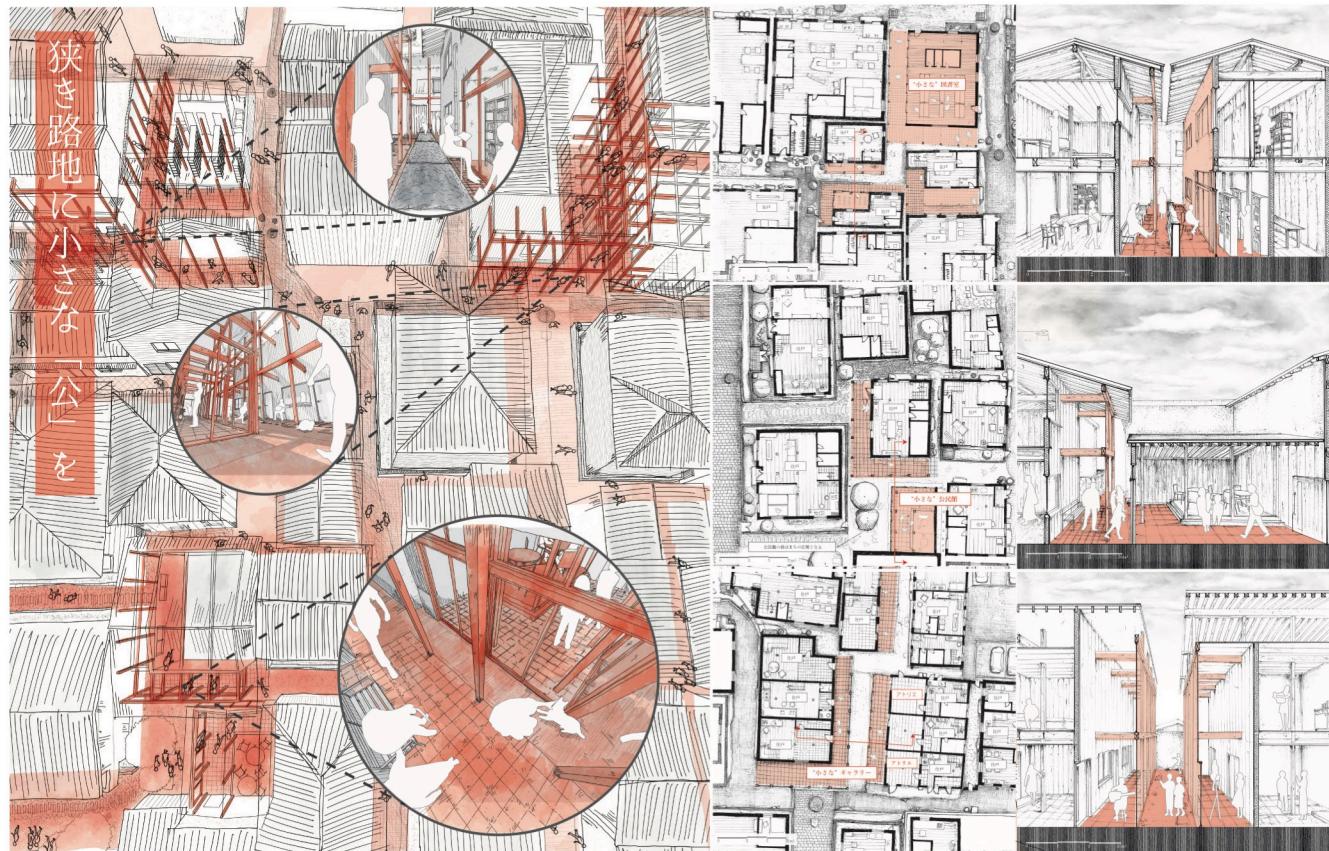
空間を「めくる」という些細な行為が、自分が周りの人々と影響し合う中で生きており、その周りの存在こそが自分を形成する「他者」であることを認知するきっかけとなる。日常をめくることで人々との間にやわらかな関係性が生まれる空間のあり方を提案する。



狭き路地に小さな「公」を

二宮幸大 森健太（未包研究室）

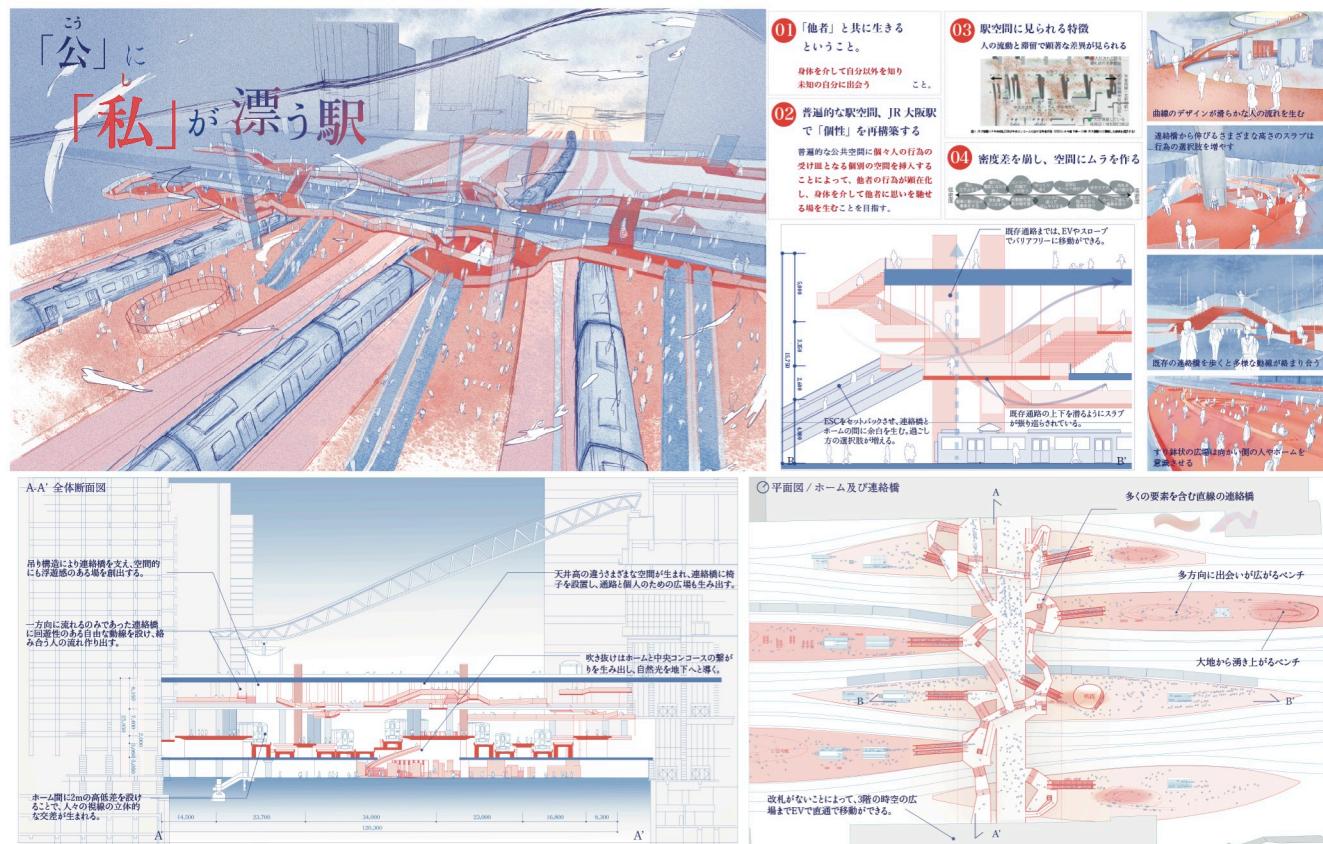
木密地域の「路地」は、地域のアイデンティティを生む一方で、環境の悪化を招いてしまう、二面性を孕んだ「他者」である。減築によって路地を拡幅し、新たに生まれた空間に、従来の公共施設のスケールを下げる小さな「公」を挿入することで、「他者」である路地との共存を図る。



「公」に「私」が漂う駅

足立諒 奥村紗帆 松岡絢加 篠塚（光嶋研究室）

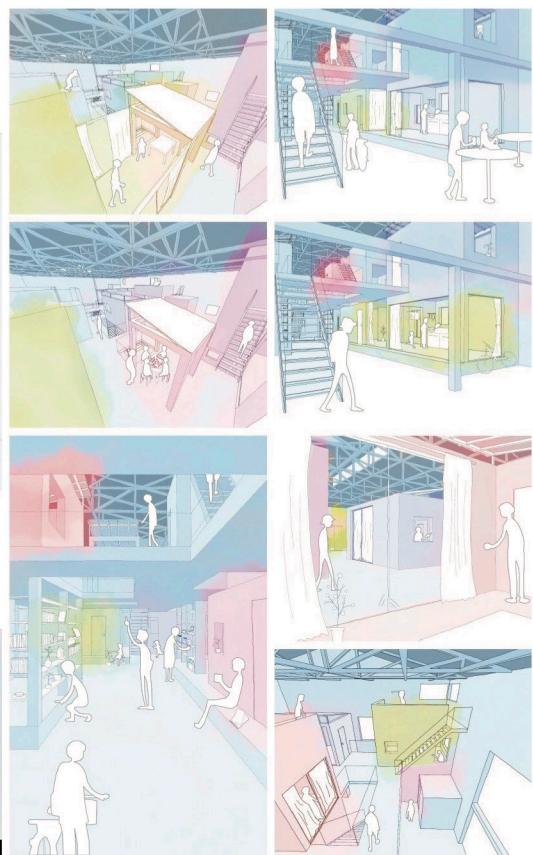
人と人との関わり合いが薄れた現在の社会における駅空間であるJR大阪駅において、人の流れや密度を崩すよう空間にムラを作り、そこに個人の行為を延長させることで新しい関わり合いを生む。身体を介して新しい自分に出会う、そこは「他者と共に生きる」場そのものである。



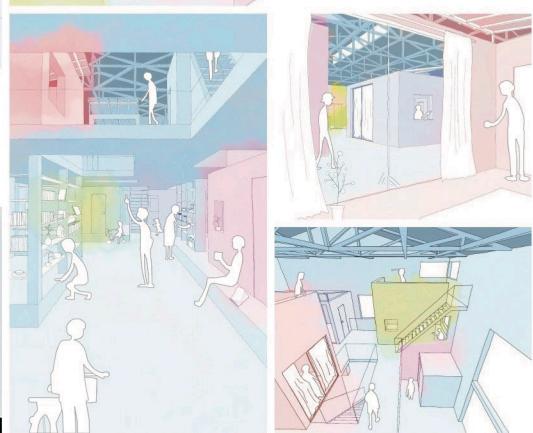
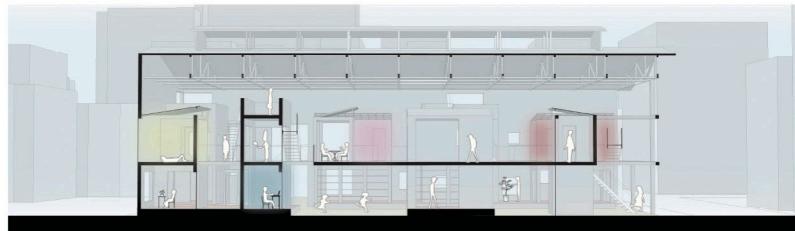
Déraciné House

森祐樹 周賢人 丸山拓弥（楓橋研究室）

「他者」=単身赴任者は、家族とその生活という責任を抱えつつ、単身赴任先では強い他者性を持って働くという二面性がある。こうした「他者」同士で共有できる「他者-家族関係」を元に、モノ・記憶・価値などの「蓄積」と家族の「あふれだし」が共存する住宅を計画する。



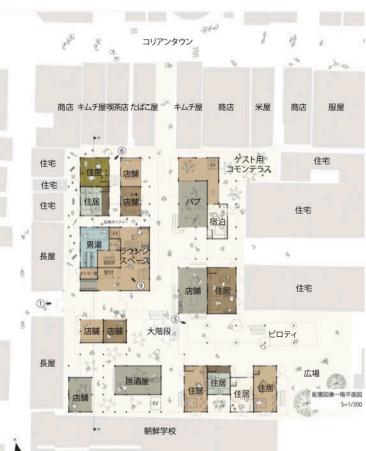
Déraciné House



つるコモ 一大阪・鶴橋における集合住宅の提案一

池内香琳 君塚俊太郎 阪上由佳 山根駿二（楓橋研究室）

現代の集合住宅は各部屋で生活が完結しており、他者との交流が希薄化している。大阪市生野区の鶴橋商店街で営まれている、生活の一部をシェアし異文化が混ざり合う住み方を応用したコモンズ空間を「つるコモ」と定義し、それらを散りばめた、他者を受け入れる集合住宅を提案する。



*右上の平面図は、国土地理院基盤地図情報基本項目を加工して作成

[担当教員]

末包伸吾（教授） 橋橋修（准教授） 光嶋裕介（特命准教授）

■課題背景

大阪湾直径約 25km の内湾エリアには、大阪市や神戸市をはじめ 20 以上の自治体（区・市）が面している。また戦前より日本最大級の重工業集積地であり、阪神工業地帯として高度経済成長期までに 25 以上の人工島（埋立地）によって沿岸部がほぼすべて人工化されている。さらに現在では大阪湾フェニックス計画（1982 年～）が進行中で、近畿 2 府 4 県の 160 を超える自治体から排出されるゴミの最終処分場として 4 箇所の海面埋め立てが進んでいる。

こうした近代化と内陸部の高密度化の影響を受け、大阪湾は半世紀以上にわたり浅海域の減少、生物多様性の低下、赤潮、青潮の発生など、環境悪化に直面してきた。2004 年以降、国や都道府県、関係機関が策定した「大阪湾再生行動計画」によって「魚庭（なにわ）の海」を創出する事業が進められている。

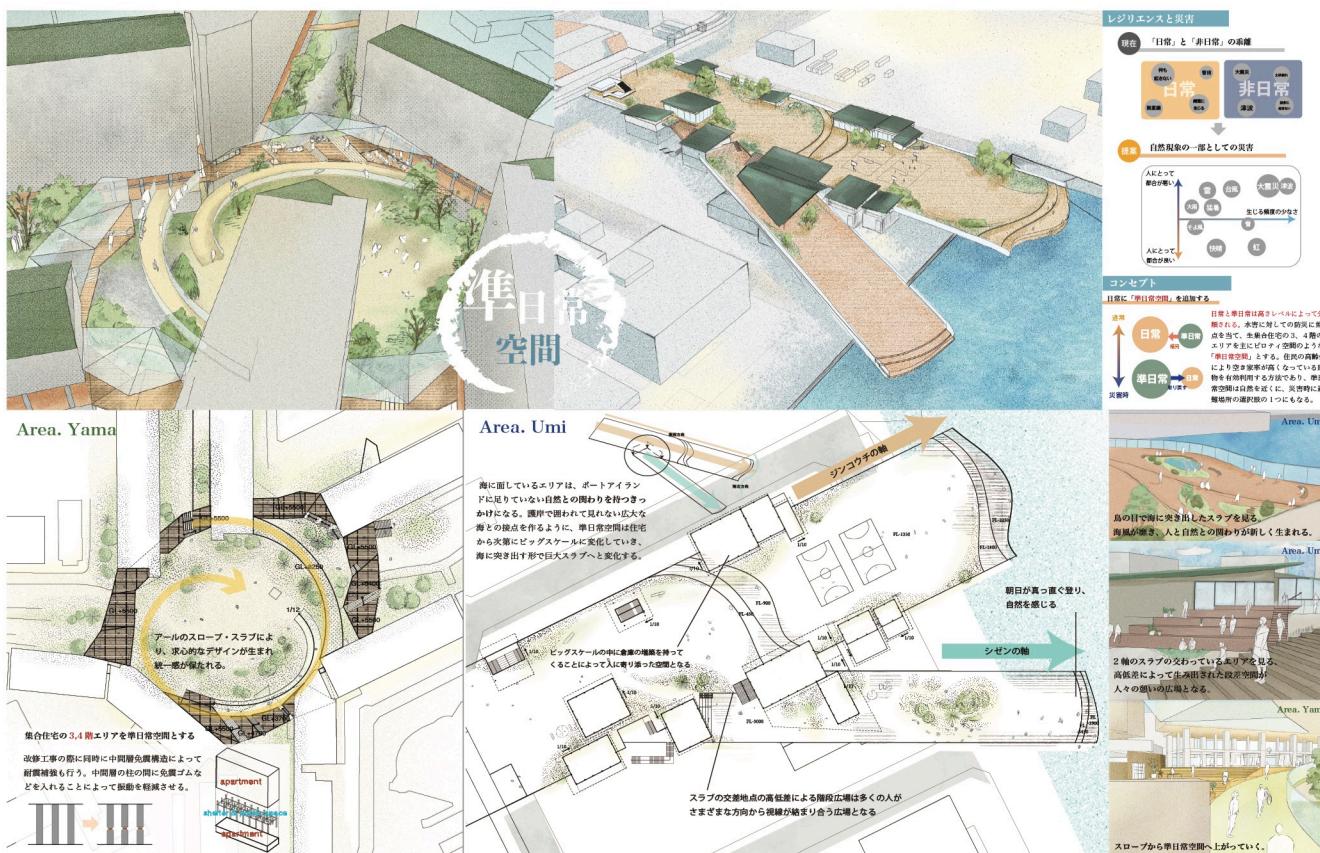
防災・減災・環境的な課題としては、地球温暖化による海面上昇、台風や暴風雨に伴う高潮、河川氾濫や内水氾濫などの水害、南海トラフ地震に代表される地震と津波の被害、水質汚染や海底ゴミ、生物多様性の減少などが挙げられるだろう。

一方、社会・経済的な変化の兆しとしては二つの国際空港による国際拠点化、ICT の急速な発展・普及によるモビリティの進化、イノベティブな産業の創出、ワークライフバランスの変化などが 21 世紀の社会変革を始めており、沿岸部に集積する製造業などもその変化を今後大きく被ることになると予測される。

準日常空間

奥村紗帆（光嶋研究室）

災害時を非日常として隔離してしまうのではなく、自然の一部として寄り添いあって暮らすために、埋立地ポートアイランドにおいて集合住宅 3,4 階に「準日常空間」を作る。ここは防災対策により分断された自然との関わりを繋ぎ、日常と非日常を結ぶ、人々の居場所となる。



2025 大阪万博・カジノなどの誘致や、神戸市ポートアイランドにおける先端医療産業の集積など、ベイエリアの空間利用のあり方にも変化が訪れていると言えるだろう。

■課題概要 RESILIENT BY DESIGN: 21 世紀のコモンズの再生に向けて

2015 年、仙台市で開催された国連世界防災会議における国連事務総長パン・ギムによる演説の中で発せられた「レジリエンス」という言葉は、地震やその他の災害に対して単に強いハードで対抗すれば良いのではなく、人的資源やイノベティブなアイデアによって、しなやかに受け止めながら、持続的に地域社会を守っていく叡智を指している。

大阪湾内湾地区の延長 60km 以上に及ぶベイエリアは、かつて「魚庭の海」と称された豊かな自然資源をコモンズとして共有している。大阪湾という自然資源と人間社会の持続的な関係を創出するプロジェクトを考える。地域住民、公務員、地方、専門家が協働し、海面上昇、暴風雨、洪水、地震に対する地域のレジリエンスを強化し、地域社会・経済を発展させるイノベティブな解決策を具体的なプロジェクトで提案してほしい。

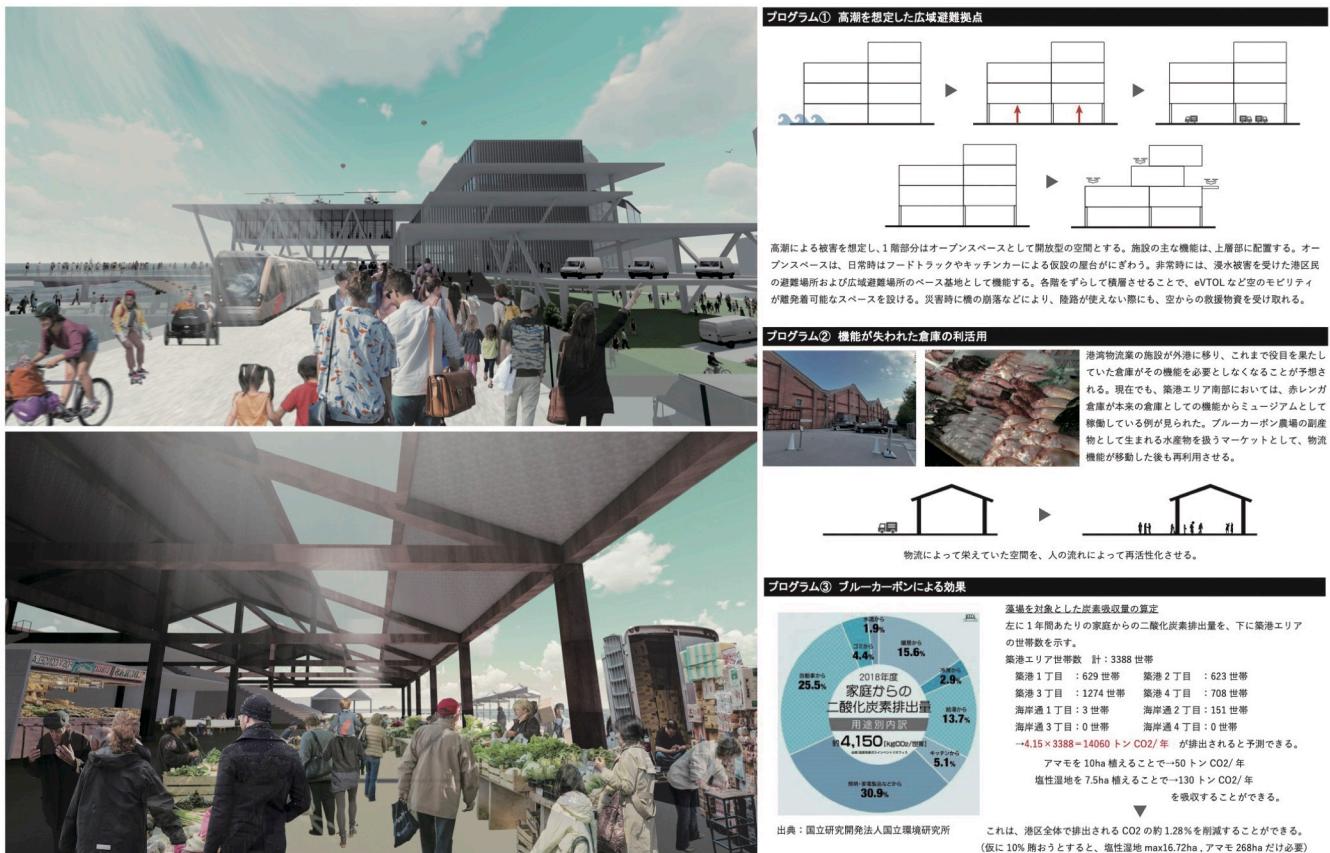
■設計要件

- ・大阪湾内湾沿岸部に具体的な敷地、区域を設定して計画すること。
- ・具体的な建築デザイン、都市デザインとして提案を作成すること。
- ・提案のベースとなる大阪湾のレジリエンス・デザインに関するリサーチ、コンセプト、戦略を含むこと。

BLUE PORT

君塚俊太郎（櫻橋研究室）

陸・海・空の主要交通結節点である大阪市港区築港エリアは、古くから災害と戦い、街を作り上げてきた。大阪港全体が高潮の被害を受けた際に、復興拠点となる施設を計画する。当エリアの大半を占める交通・物流の機能を環境機能へと再整備し、人流が生まれる港を提案する。



RESILIENT Infrastructure

二宮幸大（末包研究室）

日本全国に張り巡らされている高速道路、その立地特性や利便性の高さを生かした減災ネットワークを構築する。日常時に地域のオープンスペースとなるスラブを高速道路の径間に挿入し、災害時には高速道路も含め、仮設の避難所となる。



*図中の航空写真は全て Google Earth (Image© Landsat / Copernicus) より引用

Layer Harbor

本山有貴（光嶋研究室）

かつての水都大阪を支えた弁天埠頭を豊かな親水拠点へと再構築する。災害時には安治川水門と連携し、海拔0m地帯の核となる大規模避難拠点として機能し、災害の規模に応じてその姿を変容させながら人々を迫り来る水害から守り、地域にとっての拠り所となる。



AJIGAWA ASYL

山根駿二（楳橋研究室）

大阪市此花区に流れる安治川の上流付近を対象としたこの敷地は、水害リスクが高く、グレーインフラによって地域と分断された状態にある。そこに日常時には地域交流の場、災害時には避難施設となる建築及びランドスケープを計画し、ソフトとハードの面からレジリエンスを獲得する。

